

凍てつく大雪原をはるか  
動乱のちまたをくぐり  
ひたむきに愛し  
誠実に生きた  
一つの魂がよびおこす  
美しき感動の結晶――

＊永遠の愛をうたう《ララのテーマ》

六部門のアカデミー賞受賞  
脚色賞／撮影賞／作曲賞／美術賞／装置賞／衣裳デザイン賞

巨匠デビッド・リーン監督作品

製作カール・ポントニ  
脚本ロバート・ボルト  
音楽モリス・ジタール  
原作ボリス・パステルナク  
オマト・チャリフ／ジェラルデン・チャップリン  
ジュリー・クリステイ／アレック・ギネス／他

# ドクトル ジバゴ

METRO GOLDWYN MAYER PRESENTS A CARLO PONTI PRODUCTION  
DAVID LEAN'S FILM  
OF BORIS PASTERNAK'S  
DOCTOR ZHIVAGO

カラー作品

MGM映画 CIC配給

＜カラー作品＞  
スーパーシネラマ方式  
シネラマ  
超ステレオ音響

近日ロードショー!

特別鑑賞券 ¥900 絶賛発売中!  
＜一般 ¥1,200 学生 ¥1,000 の処＞

スーパー・シネラマシアター  
テアトル東京  
銀座1丁目(562)5301



〈カラー作品〉

# ドクトルジバゴ

DOCTOR ZHIVAGO

監製……………デビッド・リー  
 作……………カルロ・ポンティ  
 原作(小説)……………ボリス・パステルナーク  
 脚……………ロバート・ポルト  
 撮影監督……………フレッド・A・ヤング  
 音楽……………モーリス・ジャール

(サントラ盤 MGMレコード)

## ★ キャスト ★

ユーリー・ジバゴ……………オマー・シャリフ  
 ラーラ……………ジュリー・クリスティン  
 トーニャ……………ジェラルディン・チャップリン  
 パーシャ……………トム・コートネイス  
 エフグラフ……………アレック・ギネス  
 アンナ……………シオバン・マッケナ  
 アレクサンドロ……………ラルフ・リチャードソン  
 コマロフスキー……………ロッド・スタイガム  
 若い娘……………リタ・トゥシン  
 アメリア……………エイドリアン・コリ

## かいせつ

これは、ソ連の詩人で小説家のボリス・パステルナーク(一八九〇―一九六〇)の代表作の映画化である。

この小説は、第一次世界大戦及びそれに続く革命的動乱のロシアを舞台に、破壊と殺りに明け暮れる人間不在の時代を、最も人間的に生き抜いた若き医師の愛と悲しみの物語りで、一九五八年にノーベル文学賞を与えられることに決定したが、周囲の政治的事情から、パステルナークはこれを辞退しなければならなかった。このパステルナーク事件は、授賞されたが受賞されなかったノーベル賞として、当時世界の話題を呼んだ。この小説は日本でも翻訳され、ベストセラーの一つに数えられた。小説は、ソ連では禁止されたが、いち早くイタリアで出版されると、映画化権が各社によって争われたが、結局、イタリアの世界的映画製作者カルロ・ポンティの手に帰した。

そこでMGMは、カルロ・ポンティを製作者として、映画化に乗り出した。監督には、ちゅうちょなく、デビッド・リーンが選ばれた。彼は「戦場にかける橋」や「アラビアのロレンス」で、非常な、激しい環境の中に、人間性あふれる感動のドラマを描いた世界的巨匠で、「ドクトル・ジバゴ」の監督として、誰の目にも最適任者だった。

小説を読んで深く動かされたリーン監督は、登場人物の多い複雑多岐な小説を、映画的な、すっきりとしたストーリーに絞るため、「アラビアのロレンス」。「わが命尽きるとも」などのロバート・ポルトに脚色を依頼し、絶えず打合せを重ねながら、一年がかりで二八四頁のシナリオを完成した。撮影監督には、「アラビアのロレンス」で一緒に仕事をした名手フレッド・A・ヤングが選ばれた。

この映画では、ロシアの風景が、ストーリーや雰囲気作りに無くてはならない大切な要素だった。そこで、モスクワ、ウラル山地、シベリア

平原などへ、ロケ隊を送ることも検討されたが、実現が不可能だったので、他の方法でこれをカバーしなければならなかった。

まず、スペインのマドリッド郊外四万平方メートルの土地いっぱい、当時のモスクワの都心部を再現、また、フィンランドのソ連国境に近い地方に、冬季の長期ロケが行われたり、ウラル山地のシーンには、カナダのロッキー山脈地帯や、スペインのピレネー山地が選ばれた。

音楽はモーリス・ジャールで、哀愁の「ラーラのテーマ」をはじめ、美しく心うつ作曲である。

主な出演者は、主人公ジバゴに扮するのが「うたかたの恋」夕映えなどのオマー・シャリフで、彼を愛する二人の女性には、遙か群衆を離れて「ナッシュビル」などのジュリー・クリステイと、「悲しみは星影と共に」ある晴れた朝突然に「などのジェラルディン・チャップリンが懸命な演技を競っている。彼らをめぐり、「魚が出てきた日」将軍たちの夜」などのトム・コートネイス、「危険な旅路」さらばベルリンの灯」などのアレック・ギネス、「人間の絆」のシオバン・マッケナ、「カーツーム」のラルフ・リチャードソン、「質屋」夜の大捜査線」などのロッド・スタイガールたちが、豊かな演技力でドラマを盛り上げて行く。

この映画のワールド・プレミアがニューヨークで開かれた時、AP通信の映画記者は、「ハリウッドは、『風と共に去りぬ』以来忘れられていた映画の感動を、『ドクトル・ジバゴ』により、再びわれわれに与えてくれた」という賛嘆の電報を世界中に打電したが、この感激はやがて世界中をおおいつくし、ロンドンでは今もなお記録的なロングランが続いている。また、脚色、撮影、音楽、美術、装置、衣装デザインの一部門のアカデミー賞を獲得したが、これは一九六五年度における最多受賞である。

(二四巻) 三時間一五分)

## あらすじ

ロシア。十九世紀の終りに近い頃、ユーリー・ジバゴは、八歳で父母を失い、化学者のアレクサンドロ・グロメーコのもとに引きとられ、彼や妻のアンナから実の子のように可愛がられて何事もなく育てられた。青年になったジバゴは、詩人として知られるようになったが、もつと直接社会に役立つ職業をと、医学を勉強していた。この家の娘トーニャは、幼い頃から彼を尊敬していたが、いつか深く愛するようになり、両親も、ゆくゆく二人が結婚してくれればと望んでいた。

グロメーコ家から余り遠くない所に、仕立屋のアメリア・ギンシャルが住んでいた。娘のラーラは純真で頭が良く、革命に若い情熱を燃やすす学生パーシャ・アンティポフに愛されていた。アメリアにはピクトル・コマロフスキーという弁護士のパトロンのいたが、ある夜、ラーラが自分の悪い母の代りに彼と食事に外出したことから、秘密の情事が始まった。それと知った母親が、自殺を計ったが、幸いコマロフスキーの友人の医師のおかげで命を取りとめた。この医師についてきた若い見習いがジバゴだった。

その後もラーラは、コマロフスキーの誘惑から逃がれることができなかったが、不潔な情事からわが身を振りほどこうと必死になっていた。そして思い余った彼女は、クリスマス舞踏会の夜、ピストルでコマロフスキーを射った。幸い急所はずれ、居合わせたジバゴが傷の手当をしてやった。

一九一四年、ロシアは第一次大戦に突入した。これを機に革命運動は活発化した。彼らは敗戦から革命へのコースを信じ、敗戦の組織化に懸命だった。その組織者の中に、ジバゴの異母兄エフグラフがいた。

その頃、ジバゴは医師として戦線の背後におり従軍看護婦となっていたラーラに再会した。彼は既にトーニャと結婚し、彼女もパーシャと結婚、女の子があつたが、パーシャの戦死が報ぜられていた。二人の間は友情から愛情にまで高まって行つたが、兵の戦線放棄が始まり、内戦がいよいよその激しさを加えるようになって、ラーラは幼い娘のことが心配のあまりグラドフに帰り、ジバゴも家族のいるモスクワに戻つた。

革命の手に帰したモスクワには、昔の華かさや優雅さは全くなく、あゝるものは飢と欠乏だった。ジバゴは、兄エフグラフの計いで、家族と共にウラルのワルイーキノに出かけた。

モスクワからのこの旅は、まるで悪夢のような幾週間であつた。途中、ジバゴは、白軍のスパイではないかと疑われ、人々から鬼のように恐れられていた赤軍のストレーリニコフ將軍直き直きの取調べを受けた。この將軍こそ戦死と信じられていたラーラの夫パーシャだった。ジバゴは彼の口から、ラーラがワルイーキノに近いユリヤチンに居ることを聞き、彼女を訪ねた。

ラーラとの愛の生活が続いたが、トーニャに二人目の子が生まれると知り、ひそかにラーラに別れを告げた。途中赤色パルチザンの一隊に捕らえられ、彼らと行動を共にしなければならなかった。

だが愛する人たちのことが心配のあまり脱走、病の身に鞭打つて死の思いの旅を続けた末ラーラにめぐりあつて、トーニャが夫とラーラとの愛情から身をひき、子供を連れてパリへ去つたことを知った。

二人が荒廃したユリヤチンで楽しい日々を送っている時、思いがけなく弁護士のコマロフスキーが現われて彼らの幸福を突き破つた。そして……。